



WONDERFUL WORLD JAZZ FOUNDATION
日本レイ・アームストロング協会
ワンダフルワールド通信

日本レイ・アームストロング協会（ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF）2011年4月発行
 〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 Tel.047-351-4464 FAX047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp
 ホームページ <http://members3.icom.home.ne.jp/wjf/>
 発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫

3-11 東日本大震災 復旧・復興支援にWJFも奔走

ジャズの故郷・ニューオリンズからも外山夫妻のもとに「恩返し」の奇金

3.11-世界を駆け巡った「東日本大震災」。地震、津波、原発事故、さらには、言われなき風評被害…。私たちは、なすすべもなくニュースにくぎづけにされていたが、外山喜雄・恵子夫妻のもとには即刻、ニューオリンズから次々と激励のEメールが入り、支援の手がさしのべられていた。「あなた方がニューオリンズに施してくれた善意を、私たちは決して忘れてはけません。今度は、私たちがあなた方を助ける番なのです」。その最初の「実質的な善意」は、「ティピティナス・ファウンデーション」からだった。最大の被災地の一つ、気仙沼市では、ジャズを愛するジュニアバンドのすべての楽器が…いや、楽器はもとより、リハーサルルームも、楽譜も、譜面台も…根こそぎ津波にさらわれてしまっていた。外山夫妻からそんな「悲報」を聞くやいなや、彼等は即答した。「わかった、子供たちの楽器は、すべて我々が支援する」…。各地に広がり続ける「善意の輪」を追った。

「ティピティナス・ファウンデーション」は、ニューオリンズでも著名なジャズのライブハウスが運営。同地に在住の日本人女性が気仙沼の惨状を伝えると、二つ返事が返ってきた。「5月2日に、こちらで支援コンサートをやります。それですべてバックアップしましょう」。外山夫妻のもとにさっそく問い合わせが入る。仙台のライブハウス「ジャズ・ミー・ブルース『NOLA』」のオーナーで、WJFのニューオリンズ支援のさいにも最大限の協力を惜しまなかった佐々木孝夫さん(写真右、中央=外山夫妻)からは、すでに気仙沼ジュニアジャズオーケストラ「スウィング・ドルフィンズ」への「復旧支援ライブ」の呼びかけも入っていた。



「ライブは気仙沼市で4月24日。早急に補充したい楽器は、アルト、テナー、バリトンサクソ各2、トランペット、トロンボーン各4の計14本」との情報。ティピティナスからは「OK! すべて引き受けた」。でも、5月では間に合わない。「大丈夫、前倒して、義援金を立て替えて送ろう。いくら送ったらいい?」。

外山夫妻は、さっそく楽器商(株)グローバルの福田忠道会長に相談を持ちかけた。グローバルは長年 WJF に超破格値で楽器を提供、さらに WJF に寄贈されてきた楽器は関連のグローバル管楽器技術学院で無償修理してくれている。これまで800本近い管楽器がニューオリンズに送られている。福田会長の決断は早い。「14本の楽器の見積もりは計185万円です。復興支援というのですから、まあ計90万円で結構です。みんな流されてしまったというでしたら、譜面台もなくしてしまったんでしょ? 譜面台20セットも付けて、すぐに仙台にお送りします。なあに、送料なんていりませんよ」。

WJF から外山さん宅にあったエレキベース、エレキギター、キーボード、アンプも後を

追う。ドラムセットは、4月2日に大震災復興支援チャリティーコンサートを開催した直後の「ジャズの街 うつのみや」から「サッチモの旅」同窓生、吉原郷之典さんがマイカーを駆って仙台へ。「うつのみやジュニアジャズオーケストラからのプレゼントです」と。

仙台に集結されたこれらの楽器はすべて4月16日、仙台の佐々木さんらの手で気仙沼に運ばれた(写真下)。新聞、テレビ…各マスコミがこぞって、受け渡しのシーンを取材してくれた。佐々木さんから楽器を手にした子供たちの生の声が伝えられた。「かっこいい!」「吹きやすい!」「いい音する!」「楽しい!」…。子供たちはさっそく音合わせ、リハーサル…。24日の本番が待ち遠しい。



ティピティナスからは、日を置かずして「WJF ニューオリンズ基金」への振り込みがあった。総額1万1000ドル(1ドル=82円換算で約90万円)! 何とも、スピーディーにすべてが進められた。「本当に皆様のおかげで…」と外山夫妻は、目を潤ませる。

ニューオリンズから外山夫妻のもとには、かつてハリケーン被害の際に WJF から1万ドルを寄贈した現地の「アラビ・レッキング・クルー」、楽器の贈呈を続けているオー・ペリー・ウォーカー高校の音楽ディレクター、ウィル

バート・ローリンズ先生、バンドの父兄会、TBCブラスバンド、無料音楽教育団体「ルーツ・オブ・ミュージック」などから支援と激励の声。地元紙「タイムズ・ペカユーン」のシーラ・ストロウブ記者は、同紙とホームページで大々的に支援を呼びかけてくれた。「さあ、今度は私たちが日本の素晴らしいお友達、外山夫妻を助ける番よ」と。

4.24「気仙沼復興支援ライブ&サポート広場」へ急行 被災地でジュニアジャズオーケストラ「スウィング・ドルフィンズ」と合流

4.23、外山喜雄とデキシーバンドのデキシーランド「イクスピアリ」での復帰演奏を終えたあと、午後7時前、外山夫妻と藤崎羊一、



それに私(小泉)の4人は、外山さんのマイカーでまずは仙台へ。翌24日、朝8時すぎ、仙台を発って気仙沼に向かう。正午前、現地着。ここはまさに被災地のど真ん中。しかも周辺から避難されてきている方々が、いまま多数滞在されている避難所「気仙沼市総合体育館」前の広場。仙台から一足先に到着して会場作りを進めていた佐々木孝夫さんはじめ、仙台の定禅寺ストリートジャズフェスティバルや「スウィング・ドルフィンズ」のみなさんのバンドと合流した。

午後1時、支援ライブがスタート。次々と仙台からの応援バンドが演奏、デキシーバンド「ジャンピング・クロウ」には、若者たちに混じってさっそく外山喜雄(tp,vo)・恵子(bj)夫妻、藤崎羊一(el-b)が加わる。次第に盛り上がり、いよいよ登場! 「スウィング・ドルフィンズ(SD)」の24人。手拍子と声援がわき上がる。ここで司会者から改めて外山夫妻と、ニューオリンズからの「恩返し」の支援が伝えられる。金色に輝くピカピカの管楽器、それにエレキギター、エレキベース、ドラムセット、キーボード(「あら、これ、私が贈ったのよ」と再会を喜ぶ恵子さん)。前夜の大雨がウソのような澄んだ青空が広がったが、時々、譜面を吹き飛ばすような突風が襲う中での演奏。テレビカメラの放列が囲む。

バンドテーマ「ムーン・ノクターン」に次いで「オン・グリーン・ドルフィン・ストリート」「ジェリコの戦い」「ウッディー・チョッパーズ・ボール」…。SDのOB、OGバンドも交えた演奏



では「我は海の子」「故郷(ふるさと)」…これには涙をぬぐう人たちが目立った。バンドの女の子がマイクで会場に呼びかけたんです。「家を流され、気仙沼を離れていく方もいらっしやると思

ますが、どうかこの曲を聴いて“ふるさと気仙沼”を思い出して下さい!」。そして外山夫妻にお返しのプレゼント。これがなんと大きな「大漁旗」(左の写真下)。そこには「ニューオリンズのみなさんありがとう」と大きく書かれ、回りには、子供たちの寄せ書きがいっぱい。

エンディングは出演者全員による合同演奏「聖者の行進」(写真上)。午後3時過ぎ、ライブが終了すると、なんと! 外山夫妻にサインを求めてバンドの子供たちの長蛇の列が出来る。サインに添えて「元気にスウィングして下さい、ニューオリンズまで届くように!!!」とひと言。「みんなニューオリンズのことにも、関心を持ってくれたようですよ」と夫妻はにっこり。みなさんとの挨拶やら何やら…気仙沼港の惨状を脳裏に収めたりして、気仙沼を離れたのは午後5時前。結局、この日は都心に戻れず那須泊まりとなりました。

この復興支援ライブの様子は、当日夕刻のフジテレビをはじめ、翌日夕のテレビ朝日、午後9時のNHKニュースで放映され、朝日新聞朝刊や数えきれないほどのマスコミ各社の電子版記事…。YouTubeにも即、映像を流し、駐日アメリカ大使のルースさんは米大使館のホームページにツイッターするほどの熱の入れよう。「わー、これではオバマ大統領も見てくれそう!」と外山夫妻は大感激。もちろんニューオリンズにも、ニュースは即刻伝わり、感動の輪が広がっている。

(2011.4.26 記)

(詳細は次号の「会報68号」の特集記事で)